

## 楊家将の第三世代以降について

—— 楊文廣を中心に ——

田 淵 欣 也

### ◆要 旨

本稿は、史実と物語の間で大きく異なる楊家将の第三世代以降について、史実において楊業の孫に当たる楊文廣を中心として考察するものである。

まず、楊文廣にまつわる史実の確認を行った。『宋史』「楊文廣傳」の記述はかなり簡略なものであるが、同時代の史料を併用することにより、楊文廣の足跡を更に詳しく補って辿ることができた。続いて、物語における楊家将の第三世代以降の状況を検討した。その出生の状況も含め、楊文廣が第何世代に属するかは、小説のテキストによって異なっている。それと対応して、物語中では、楊文廣の父または兄として、楊宗保という架空の人物が登場する。これは、実在の楊文廣が楊延昭の晩年に生まれたことを意識して、その空白期間を埋めた上で、楊家将物語の特色の一つである父子が共に出陣する場面を描くために作られた設定であった。

物語中の楊文廣には息子が四人いるが、特に目立つのは四男の楊懷玉である。楊懷玉は戦場で活躍した後、最終的に、奸臣が絶えることのない朝廷との決別を宣言するに至る。その言動には、『水滸傳』などとも共通する武人の自己主張が鮮明に打ち出されていた。

最後に、楊業の弟である楊重勳の子孫に当たる楊家の一族を取り上げた。中でも楊暉は、武家の生まれにして文臣として活躍した人物であるが、その背景として、ほぼ同年代を生きた楊文廣とは対照的に、戦場で思うような功績を挙げられなかったことが関係していると考えられる。

キーワード：楊家将，楊文廣，楊宗保，楊懷玉，楊暉

(2019年8月30日論文受付，2019年11月8日採録決定 『都市文化研究』編集委員会)

## はじめに

楊家将の物語は、北宋に仕えた楊一族をモデルとし、彼らが国内外の敵と戦うさまを描いている。物語の内容は、初代の楊繼業（楊業）の世代までは比較的史実を基礎としているが、次の楊六郎（楊延昭）の世代からアレンジが目立つようになり、史実との乖離が大きくなっていく。さらに世代が進むと、実在しなかった人物までが楊家の当主として登場するようになる。本稿は、史実において楊業の孫に当たる楊文廣を中心として、史実と物語の間で大きく異なる楊家将の第三世代以降について考察するものである。

## 1. 実在の楊文廣について

史実において、楊業（?～九八六）、楊延昭（九五八～一〇一四）に続く楊家将の三代目は、楊文廣（?～一〇七四）である<sup>1)</sup>。楊文廣の伝は、『宋史』卷二百七十二に祖父及び父と共に立てられているが、その記述はかなり簡略なものとなっている。以下、『宋史』「楊文廣傳」に基づき、適宜補足しながら楊文廣の足跡を見てみよう。

楊文廣は、字を仲容といい、賊の張海を討った功により殿直の官を授けられた。范仲淹が宣撫使として陝西にいた時、その優れた才を認め、麾下に置いたという。また狄青の儂智高征伐に従い、知徳順軍（寧夏回族自治区隆徳県）から廣西鈴轄、知宜州（広西チワン族自治区宜

州市）・邕州（広西チワン族自治区南寧市）となり、次いで左藏庫使、帶御器械に昇進した。

ベトナム李朝や北宋に対して反乱を起こした儂智高は、皇祐四年（一〇五二）には邕州へと侵攻したが、皇祐五年（一〇五三）、狄青に敗れて雲南地方へ逃れた。この時期の楊文廣に関する資料として、他に北宋の沈遘『西溪集』巻五に収められる「西京左藏庫副使楊文廣可供備庫使（西京左藏庫副使の楊文廣を供備庫使とすべし）」がある。

楊文廣に勅す。先頃南の蛮族が皇帝の恩に背いて反乱を起こし、我が府県を壊滅させ、軍を出動させるに至って平定された。朕は徳がなく、蛮族の地を懐かせて服従させることができなかつたとはいえ、それはまた文武の官が警戒と訓練を怠っていた罪でもある。故に深く以前の過失について考え、派遣する者を選抜するにも、一層軽々しくはしない。そなた文廣は、武勇に優れ忠義深く、経験豊かで功績を立ててきた。故に今そなたに一地方の兵を統率して廣西を守らせる。またそなたを諸使の正職に昇進させて、その行いに重みを持たせる。そなたは我が命を慎んで聴け。国境地帯を警戒して戦術を練り上げ、南方で警戒する必要が無くなり、私がしかるべき人物を知っていたということになれば、それはそなたの功績である。大いに慎んで事に当たるように。裁可<sup>2)</sup>。

これにより、楊文廣が戦後に供備庫使となったことがわかる。また「惟爾文廣、材武忠勇、更事有勞（そなた文廣は、武勇に優れ忠義深く、経験豊かで功績を立ててきた）」とも述べられていることから、楊文廣が武人として一定の評価をされていたことは間違いない。

治平年間（一〇六四～七）になると、英宗によりその血筋と功績を評価され、成州（甘肅省成県）團練使、龍神衛四廂都指揮使に選ばれ、また興州（陝西省略陽県）防御使、秦鳳副都總管となった。『宋史』「楊文廣傳」によればこの頃、陝西經略安撫使であった韓琦の命を受けて城を築く際に、わざと違う地に城を築くと噂を流し、敵の注意をそらした上で一挙に築き上げるという策を用い、迎撃に来た敵軍をも打ち破ったという。

韓琦が筆架城を築かせた時、楊文廣は噴珠に城を築くと噂を流し、大勢を率いて急いで筆架へ向かった。暮れ頃にそこへ到着すると、一部は既にできていた。夜明けに敵騎が大勢でやって来たが、攻め込めないと知るや引き上げ、「国主に報告して、数万の優れた騎兵でお前を追い払おう」と書いた手紙を送った。楊文廣は将校を送ってこれを襲撃させ、多

くの者を斬ったり生け捕ったりした<sup>3)</sup>。

このエピソードは「楊文廣傳」において、恐らく楊文廣の生涯における最大の戦功として特筆されている。そのため、あるいは小説などに素材として取り入れることも可能だったのではないかと思われるのだが、結局そうはならなかった。その理由は、記述の簡略さによるものだけではないだろう。後世の楊家将物語は、楊六郎の代で既に史実から大きく離れ、元盗賊の孟良と焦贊のような豪傑や、木桂英を始めとする巾幗英雄が活躍するようになる。戦闘の場面はより非現実的な描写へと傾き、遂には法術を使って敵将を討ち取ってしまうのである。物語が史実から乖離していくに従い、このような楊文廣のエピソードを取り入れる必要性はなくなったか、もしくはエピソードが入り込む余地自体が既になくなっていたのであろう。

その後、楊文廣は知涇州（甘肅省涇川県）・鎮戎軍（寧夏回族自治区固原市）、定州（河北省定州市）路副都總管となり、歩軍都虞候へ移った。遼が代州（山西省代県）を攻めようとしたため、楊文廣は遼を攻める献策をしたが、返事が来ないうちに亡くなり、同州（陝西省大荔県）觀察使を贈られたという。

楊文廣の息子に関しては記録がなく、そもそもいたかどうかも確かでないため、楊業から続く一族のその後をたどることは不可能となる。なお北宋の曾鞏『隆平集』巻十七・武臣の条は、楊延昭の息子について次のように記す。

（楊延昭が）没し、年は五十六歳であった。詔を下して息子の傳永、徳政、文廣を登用した<sup>4)</sup>。

これによると楊延昭には、楊文廣の他に傳永と徳政という息子がいたことがわかる。傳永と徳政について詳細は不明だが、名を挙げられている順序から推測すると、楊文廣の兄と見るのが自然であろう。楊延昭は一〇一四年に没しており、楊文廣の生年は不明だが、『續資治通鑑長編』巻二百五十八・熙寧七年十一月丁酉の条により、没年は一〇七四年とわかる。ここから、恐らく楊文廣は楊延昭の晩年に生まれた息子と考えられ、あるいは兄との年齢差もかなり開いていた可能性があるだろう。

## 2. 楊宗保と楊文廣の関係

史実における楊家将の三代目は紛れもなく楊文廣であるが、後世の楊家将物語では必ずしもそのようになっていない。楊家将を題材とする小説には、『楊家府世代忠勇通俗演義志傳』<sup>5)</sup>（以下、『楊家府』と呼ぶ）と『北宋

志傳』<sup>6)</sup>の二種があり、前者では楊繼業・楊六郎・楊宗保・楊文廣・楊懷玉の五代にわたる話が綴られている。つまり『楊家府』では、楊延昭の息子として楊宗保なる人物が登場し、楊文廣はこの楊宗保の息子とされ、楊家将の三代目は楊宗保、四代目は楊文廣という設定になっているのである。

楊宗保は、楊六郎と柴郡主の間に生まれた息子として、『楊家府』第四卷第三則で初登場する。この時には十三歳の少年であったが、神から兵書を授かり(第四卷第六則)、眞宗と群臣から一歳ずつ贈られる儀式を受けて成人し<sup>7)</sup>(第五卷第二則)、やがて押しも押されもせぬ將軍へと成長していく。遼が布く天門陣を破るための戦いでは、父を差し置いて全軍の指揮を執るまでになった。

遼との戦いの最中には、女将の木桂英とも出会っている。『楊家府』第五卷第一則で、楊宗保は天門陣を破るために必要な降龍木を木桂英から借りようとし、断られると戦いを挑むのだが、木桂英に生け捕りにされてしまった。しかし木桂英が楊宗保に惚れ込んだことから、結局二人は結婚するのである<sup>8)</sup>。遼が平定された後、楊宗保は引退していたが、第六卷第七則で、儂智高の反乱に悩まされていた朝廷から召し出された。この際に息子の楊文廣も登場し、父子で出陣して反乱の鎮圧に貢献した。

また楊宗保は、楊家将ものの雑劇「破天陣」にも登場している。「破天陣」は、趙琦美による『脈望館鈔校本古今雜劇』(万曆四十~四十五年〔一六一二~一六一七〕校定)に内府本として収められている無名氏の作品で、題目を「韓延壽索戰賭三籌」、正名を「楊六郎調兵破天陣」という<sup>9)</sup>。遼軍に包囲された銅臺城を救うために六郎楊景が出陣し、遼の軍師である顔洞賓が布く強力な天陣を破るという内容である。

ただし劇中における楊宗保は、特に際立った描写があるわけではない。第二折で父や諸将らと共に出陣し、天陣の一つである天門陣を攻めようとする場面で、父子が次のような会話を交わしている。

楊景 將軍達よ、誰かあの天門陣を攻めようという者はいるか。

楊宗保 父上、私が天門陣を攻めましょう。

楊景 楊宗保よ、お前はどのような武芸があって、天門陣を攻めるつもりなのか。

楊宗保 父上、我が体つきはりりしく、意気揚々としておりますから、蕃兵の陣を攻めて戦いましょう。

楊景 (唱う)

【上小樓】

“彼は意気揚々と武威を誇示し  
りりしく軍装を整える”

楊宗保 私に父上の素晴らしい計略を授けて頂けれ

ば、私は千戦千勝です。

楊景 (唱う)

“そなたを百戦百勝、千戦千勝させる、素晴らしい計略”

楊宗保 父上、我が手中の定准刀で、蕃兵と戦いましょう。

楊景 (唱う)

“そなたの定准刀が、軍馬とぶつかれば、賊軍を防ぎ

敗残軍は無数に逃げ惑う”

楊宗保よ、そなたに三千の軍勢を授けるゆえ、心して行き、勝利して戻って参れ。

楊宗保 承知しました。父上の命を受け、三千の軍勢を率いて、天門陣を攻めに、一つ行くとしよう。

“勇敢な兵を率いて銅臺を出陣すると

凶暴な匈奴は国境を侵している

刀を振るい武勇を奮わせて威武を示し

山一面にあやつらの死体を積み上げよう”

(退場)<sup>10)</sup>

この場面以降、楊宗保は集団の中に埋没してしまい、第三折でいざ天門陣を攻める場面も、「打陣科(陣を攻めるしぐさをする)」というト書きと、「打了天門陣也(天門陣を破ったぞ)」という楊宗保の白で済まされてしまう。無論、実際の舞台上では派手な立ち回りが演じられていた可能性もあろう。しかし、楊景の他の部下が陣を攻める場合もほぼ同じパターンになっているので、いずれにせよ劇中の楊宗保は、六郎楊景の息子だからといって特別な扱いを受けてはいないのである。

ここまで、楊六郎と柴郡主の息子とされる楊宗保について見てきた。しかし実は、柴郡主が産んだ子がもう一人存在するのである。柴郡主は、皇室の姫から楊六郎の正妻となったが、楊家に属す女性の例に漏れず、武芸にも優れている。天門陣攻めの際、臨月の身でありながら夫と共に戦場を駆け巡り、戦いの最中に出産することとなる。

正午になろうとする頃、柴郡主は長い間戦い続けていたところ、急に産気付き、にわかには腹痛を覚え、だんだんと耐えられなくなった。柴郡主が大声で「苦しい」と叫ぶと、部下の兵士達は皆色を失った。やがて落馬し、一人の赤ん坊を産み落とすと、意識が朦朧として地に倒れた。…〔中略〕…木桂英は馬を降り、柴郡主を助け起こし、生まれた赤子を包み、自分の懐に入れると、再び柴太郡を助けて馬に乗せた。その後自ら馬に飛び乗って出撃し、青龍陣を破った<sup>11)</sup>。〈第五卷第三則〉

このエピソードは、柴郡主と木桂英の奮闘にスポットライトを当てるものである。その反面、陣中で生まれた子がどうなったかについては特に触れられず、そのまま登場しなくなり、いつの間にか姿を消してしまう。しかし『北宋志傳』第三十七回の同じ場面において、この柴郡主が産んだ子こそが楊文廣とされているのである。つまり『北宋志傳』では、楊文廣は楊宗保の弟に当たり、両者とも第三世代ということになる。

楊家将物語における楊文廣が、本来第三世代であったのか第四世代であったのか、にわかには判断し難い。しかし『楊家府』は言うまでもなく、楊文廣を史実通り第三世代とする『北宋志傳』にしても、楊六郎と楊文廣との間に、楊宗保という架空のキャラクターが活躍する期間が存在することに変わりはない。では一体、なぜ楊宗保が物語に登場しなければならなかったのか。それは、実在の楊文廣が楊延昭の晩年に生まれたことと関わるだろう。史実では、楊業と楊延昭は共に陣出して武勇を振るっており、それが物語における楊繼業と七人の息子というイメージにも繋がった。しかし楊延昭と楊文廣の場合、想定される年齢差からして、二人で馬を並べて陣出したことなどなかっただろう。物語中で父子の共演を実現させようとしても、どうしても空白期間ができてしまう。そこで、年長の息子として楊宗保を登場させることにより、空白期間を埋め、楊六郎の代でも父子が共に陣出することを可能にさせたのである<sup>12)</sup>。

実在の楊文廣の生年は確定できないし、また虚構の物語であるならば、あまり史実にこだわる必要はないのかもしれない。そもそも楊家将物語は、既に楊六郎の代で遼を平定するなど、史実から大きく逸脱している。一方で、物語の根幹が楊業らにまつわる史実である以上、物語を編纂するに当たり、可能な部分で史実を踏まえようとする思いが働いたとしても不思議はない。楊文廣の世代設定からは、史実と虚構の間で揺れ動く物語の様相を見出すことができるだろう。

### 3. 楊文廣の息子について

二種の小説の内、『北宋志傳』は遼に続き西夏を平定し、凱旋したところで幕を閉じるが、楊家を率いたのは楊宗保であり、楊文廣については最後に「征服南方而後受封」と述べられるに過ぎない。『楊家府』では、先に触れたように、遼を平定した後は儂智高と戦うことになり、楊宗保と「息子」の楊文廣が共に陣出している。そこからしばらく時代が飛び、熙寧五年（一〇七二）に、西方の新羅国が国境を侵犯した（第八卷第一則）。この時、楊宗保は既に病没しており、楊文廣とその息子らが共に陣出するのである。

楊文廣の息子は四人おり、名を公正（一郎）、唐興（二郎）、彩保（三郎）、懷玉（四郎）というが、上の三人は非常に影が薄い。物語中で活躍するのはもっぱら四男の楊懷玉であり、宋の將軍と勝負して先鋒の任を勝ち取ったり、楊文廣の姉である楊宣娘と共に、雲に乗って八臂鬼王と戦ったりしている。しかし、楊懷玉の最大の見せ場は、『楊家府』最終話に当たる第八卷第九則に存在する。

楊家が度々国を救ったにも関わらず、朝廷には奸臣が絶えることがなく、楊家を陥れようと常に画策を続けていた。楊懷玉は度重なる讒言に堪えかね、兄と共に奸臣の張茂の屋敷に押し入って彼を殺し、その後一家を挙げて太行山に向かった。周王は神宗を説得し、楊懷玉らの罪を許す詔勅を得ると、楊家を汴京に戻らせるために太行山を訪れる。しかし、楊懷玉は次のように言い放つのである。

理によって申しますなら、我々が朝廷に背いたのではなく、朝廷が我々に負いたのです。始祖の楊繼業は、王侁により狼牙谷に陥れられ、李陵碑に頭を打ちつけて死にました。楊七郎は潘仁美により、多くの矢を身に受けて亡くなりました。楊六郎は王欽や謝金吾の害を受け、配軍（労役に当たる廂軍に入れられる）となりました。狄青や張茂の頃になると、我が祖父と我が父は官職を削られました。聖主はご聡明であられず、文臣に対しては親しく接し信頼されましたが、武臣に対しては距離を置き疎んじられたため、自らの意見を伝えることはできなかったのです。一度讒言されたならば、我らの命はたちまち刀に掛けられます。その時聖主はわずかなりとも我らの悪戦苦闘の苦しみを思い、憐れみをかけられることありません<sup>13)</sup>。

これは既に指摘があるように、武人の自己主張を鮮明に打ち出したものであり、こうした主張は、『水滸傳』やその他の歴史小説にも見ることができる<sup>14)</sup>。ここでは、楊家将物語に基づき、楊懷玉が朝廷との決別を宣言するに至った理由について、もう少し詳しく考えてみたい。

楊家は当初、楊繼業やその息子達といった強大な軍事力を抱えていながら、北漢から北宋に帰順したという経歴から、朝廷での立場は非常に危ういものであった。そして楊繼業の息子達が次々に戦死または離脱し、楊繼業自身も奸臣に陥れられて自ら死を選び、残された男子は楊六郎ただ一人という状況になった頃には、楊家は立場的にも勢力的にも弱体化の極みを迎える。しかも朝廷には、楊家を陥れようとする奸臣が常に存在していた。そのような状況下で楊家が命脈を保つことができたのは、矛盾するようであるが朝廷との繋がりがあったからこそ

である。楊家は朝廷の奸臣から攻撃を受けていたが、また一方で朝廷には、八王や周王のような楊家に好意的な人物も存在しており、彼らの庇護なくしては楊家の存続はあり得なかった。つまり楊家は、朝廷との関係において、奸臣による攻撃に苦しめられながらも、立場上その保護下にいななければならないというジレンマを抱えていたことになる。

以後の楊家は、楊五郎や楊四郎のような外部からの協力者を得、孟良や焦贛のような豪傑を配下とし、木桂英のような巾幗英雄を娶り、果ては楊宣娘のような法術使いを加えて、自らの力を揺るぎないものとしていった。朝廷との関係も、元々は楊家が朝廷の保護下にしながら、有事の際には朝廷から軍事力を要求されるという、相互協力のものであったのが、楊家が戦功を積み重ねるにつれ、いつしか朝廷が楊家を頼るという状況が目立つようになる。楊家はもはや朝廷から庇護を受けるような存在ではなくなり、むしろ実質的には、楊家が朝廷を外敵から守るようになっていた。しかし、奸臣による讒言はいつまでも絶えることがなかった。先の楊懷玉の発言は、こうした背景を受けたものだったのである。

太行山に移り住んだ楊懷玉らは、山を下りて略奪を行うことを禁じ、一家で自給自足の生活を送った。なおこの時、楊文廣は病床にあったが、楊宣娘の手はずにより安静に移動させられ、自身が太行山にいることにも気が付かぬままだった。

#### 4. 麟州楊家について

最後に、もう一つの楊家の一族について見ておきたい。史実では、楊業に楊重勳という弟がおり、北宋に仕えて麟州（陝西省神木県）に拠点を持っていた<sup>15)</sup>。この麟州楊家の子孫については、歐陽脩「供備庫副使楊君墓誌銘」（『居士集』巻二十九）に記されている。

楊重勳の息子は、楊光辰（生没年未詳）といい、西頭供奉官として麟州兵馬の監督の任となった。在官中に没したというから、あるいは戦死であったのかもしれない。この楊光辰の息子が、墓誌銘を書かれた人物に当たる楊琪（九八〇～一〇五〇）、字は寶臣である。楊琪は、代々武勇で聞こえる將軍の家に生まれながら、儒学を好んで経書や史書を読み、穏やかな性格であったという。若くして父を亡くすと、殿侍を授けられ、後に伯父に当たる楊延昭の功績によって任官され、供備庫副使まで昇進した。その後、同提點河東・京西・淮南三路刑獄公事となると、二百人余りの官僚を推挙した。皇祐二年（一〇五〇）六月壬戌に淮南で没し、年は七十一であったという。そして楊琪の息子が楊暉である。

楊暉（一〇〇七～一〇六二）は、字は樂道。諫官とし

て知られ、『宋史』巻三百に伝がある。武家の生まれにして文臣として活躍したのは、父の気質を受け継いだことによるものにも見えるが、事情はそう単純ではない。進士及第を果たし、任官して間のない頃の楊暉は、南方の異民族との戦いに明け暮れる日々を送っていたのである。

慶曆三年（一〇四三）、楊暉は提點荆湖南路刑獄に抜擢され、湖南の異民族による反乱の鎮圧に当たることとなった。激しい抵抗を受けて軍が崩れ、自身も岩から落ちて九死に一生を得るといふ目に遭いながら、楊暉は一定の戦果を上げたが、武將の戦死に連座して降格処分を受けている。一年余りして、荆湖南路兵馬鈐轄として再び起用され、湖南や廣西を転戦した。翌年に異民族は平定されたが、楊暉は熱病にかかって引き上げたという。朝廷が楊暉を起用した背景としては、国境防衛に活躍した祖先の武勇を継ぐべき者としての期待が当然あったに違いない。楊暉もその期待に応えようと奮戦したが、朝廷にとって満足できる成果であったかは疑問が残る。

更に興味深いのは、先述の楊文廣が参加した儂智高征伐に、楊暉も関わっていたことである。楊業・楊重勳兄弟の代から数えると、楊文廣は三代目、楊暉は四代目に当たるが、両者の生きた年代はかなり重なっている。互いにどこまで面識があったかは推測するしかないものの、この系譜を分かった二つの楊家が、儂智高という共通の敵を相手に戦ったことがあったのは事実である。

ただし楊暉の戦いぶりは、十分な活躍を見せた楊文廣とは対照的なものであった。儂智高が邕州を攻め落とすと、仁宗に召し出された楊暉は、諸將と共に韶州（広東省韶関市）を守ろうとした。しかし、敵軍の勢いを防ぐことはできず、諸將にも多くの犠牲者が出た。楊暉はこれに連座して降格させられてしまうのである。

楊暉は結局、儂智高征伐においては目立った戦果を挙げることができなかった。そもそも楊暉は、征伐に向かうように命ぜられた当初、父の喪を理由に一度辞退しているのである。恐らくその頃には既に、武臣として仕えることに限界を感じ始めていたのではないだろうか。またこの降格処分から間もなく、遼国へ使者として向かうよう命ぜられたが、楊業が遼に捕らえられたことを引き合いに出して辞退した、というエピソードが『宋史』「楊暉傳」に見える。

朝廷に戻って三司戸部副使となり、吏部員外郎に移った。使者として契丹へ向かうよう命ぜられたが、曾祖父の兄である楊業が敵に捕らえられたことがあったため、辞退し行くことはなかった<sup>16)</sup>。

このような楊暉の態度が周囲からどう評価されていたかは、想像に難くない。恐らくは、名門の武家に似つか

わしくない者と見られていたのであろう。遠戚の楊文廣が武臣として活躍していたならば、なおさらである。「楊旼傳」は以下のように率直な見解を載せている。

楊旼は將軍の家の出身であったが、家風を変えて学問を好み、士大夫に称えられた。山の中で蛮族を討ち、家から手紙が届けば、これを焼き、兵士と苦楽を共にし、多くの峒を破った。また嶺南でも起用されたが、功績が無かったために責められ、名誉は衰えてしまった<sup>17)</sup>。

以後、文臣として身を立てることを選んだ楊旼は、龍圖閣直學士、知諫院にまで至る。嘉祐七年（一〇六二）に五十六歳で没し、右諫議大夫を贈られた。

楊旼の息子として知られる人物に、楊祖仁（一〇六一～？）がいる。蘇轍「楊樂道龍圖哀辭并敘」（『欒城集』卷十八）が記すところでは、楊旼が死去した時、楊祖仁はわずか二歳だったという。また楊旼には妹（一〇三六～一〇九五）がおり<sup>18)</sup>、張岫による墓誌銘「宋故壽陽縣君楊夫人墓誌銘」<sup>19)</sup>が残されているが、その題後の文によると、楊祖仁は紹聖二年（一〇九五）の時点で、右宣義郎、簽書崇信軍（湖北省隨州市）節度判官公事であったことがわかる。ただし、楊祖仁に関してこれ以上の記録は残されておらず、楊文廣と同じく、もはや楊旼の子孫をたどることはできない。

## おわりに

本稿では、楊家将の第三世代以降について、楊文廣を中心として考察を行った。

まず、『宋史』「楊文廣傳」に加えて同時代の史料を併用することにより、楊文廣にまつわる史実を補いながら確認した。続いて、物語における楊家将の第三世代以降の状況を検討した。楊文廣は、小説『楊家府』では第四世代、『北宋志傳』では第三世代に属しており、それと対応して、楊文廣の父または兄として楊宗保という架空の人物が登場する。これは、実在の楊文廣が楊延昭の晩年に生まれたことを意識して、その空白期間を埋めた上で、父子が共に出陣する場面を描くために作られた設定であった。

物語中の楊文廣には息子が四人おり、特に四男である楊懷玉の活躍が目立つ。楊懷玉は最終的に、奸臣が絶えることのない朝廷との決別を宣言するに至るが、その言動には、『水滸傳』などとも共通する武人の自己主張が鮮明に打ち出されていた。

最後に、楊業の弟である楊重勳の子孫に当たる楊家の一族を取り上げた。中でも楊旼は、武家の生まれにして

文臣として活躍した人物であるが、その背景として、ほぼ同年代を生きた楊文廣とは対照的に、異民族や農智高との戦いで思うような功績を挙げられなかったことが関係していると考えられる。

楊家将の第三世代以降の状況は、史実、小説、戯曲などで大きく異なり、複雑な様相を呈している。本稿では楊文廣を軸とすることにより、その整理にある程度の便宜が得られたと考えるが、一方で世代の流れを概観するに留まり、個人に関してより詳細な分析はできなかった。語り物などに範囲を広げたならば、ヴァリエーションは更に増えるはずであろうし、また楊文廣を主人公とする単独の小説も存在しており、楊家将物語の広がりや尽きることが無いかのようである。これらを視野に入れて考察することも、今後の課題としたい。

## 注

1. 楊文廣についての先行研究としては、何冠環「北宋楊家将第三代傳人楊文廣事蹟新考」（蔡向昇・杜雪梅主編『楊家将研究・歴史卷（楊家将研究叢書）』人民出版社、二〇〇七年所収。初出は『嶺南學報』新第二期、嶺南大學人文學科研究中心、二〇〇〇年）があり、楊文廣に関する歴史的事績を、周辺人物との繋がりにも注目しながら網羅的に考証している。また松浦智子「楊家将の系譜と石碑—楊家将故事発展との関わりから—」（『日本中国学会報』第六十三集、二〇一一年）は、播州や代州の楊氏が楊家将を利用して一族の系譜を創作していたことについて、碑文などを検証しながら論じたものだが、その八五～八七頁で楊文廣を含む楊業の一族について考察している。
2. 原文は「勅某。前日南夷負恩爲亂，以覆壞我郡邑，至於用師而後定。雖朕不德，不能懷服方外，而亦將吏不戒不習之罪也。故深察往失，而推擇所遣，益不敢輕。惟爾文廣，材武忠勇，更事有勞。故今以爾總一道之兵戍於邕管。又陞爾於諸使之正，以重其行。爾其祇聽朕命。戒疆事習軍計，使南徼無警，而朕爲知人，則時乃之功矣。其往欽哉。可。」
3. 原文は「韓琦使築筆架城，文廣聲言城噴珠，率衆急趣筆架。比暮至其所，部分已定。遲明，敵騎大至，知不可犯而去，遺書曰，當白國主，以數萬精騎逐汝。文廣遣將襲之，斬獲甚衆。」
4. 原文は「卒，年五十六。詔錄其子傳永，德政，文廣。」  
楊延昭の息子として傳永と德政の名が記されているのは、管見の限り『隆平集』のみであり、『宋史』「楊延昭傳」をはじめ、南宋の王稱『東都事略』卷三十四、南宋の章定『名賢氏族言行類稿』卷二十二などには見えない。ただし「楊延昭傳」に「録其三子官」という記述はある。
5. 紀振倫（秦淮墨客）序，万曆三十四年（一六〇六）序刊本，全八卷五十八則。テキストには『楊家府世代忠勇演義志傳』（国立中央図書館，一九七一年）を用いた。
6. 熊大木作，万曆二十一年（一五九三）序刊本など，全十卷五十回。テキストには『南北兩宋志傳』（『古本小説叢刊』第三十四輯，中華書局，一九九一年）を用いた。
7. 当時まだ若かった楊宗保は、遼軍の韓延壽に一喝されて落馬するほどだった。そこで鍾道士（漢鍾離の化身）の助言により眞宗は壇を築かせ、その上で楊宗保を元帥に任じ、眞宗が一歳、群臣が一歳を贈って十六歳の成年にさせたのである。
8. 楊宗保と木桂英の結婚については、田淵欣也「楊家将物語における龍退治について」（『中国学志』離号，大阪市立大学中国学会，二〇一二年）二～三頁でも言及した。

9. 主な登場人物は、苗士安（楔子の正末）、楊景（第一折以降の正末）、岳勝、寇萊公（沖末）、呼延必顯、顔洞賓（浄）、胡祥、焦贊、孟良など。以下にあらすじを示す。

寇萊公は銅臺城において韓延壽の率いる軍によって包囲されていたが、ある夜に帝が不思議な夢を見る。陰陽臺官の苗士安に夢占いをさせたところ、汝州にいる楊景が危機を救ってくれるとのことであった。楊景は勝手に三関を離れた罪によって首を斬られたはずであったのだが、寇萊公は占いを確かめるために、呼延贊の子である呼延必顯を汝州へ向かわせ、楊景の罪を許して韓延壽軍を破るよう命じる。〈楔子〉

韓延壽の軍師である顔洞賓は、宋の都を奪うために強力な天陣を布く準備をする。汝州では太守の胡祥が楊景をかくまっていたが、呼延必顯が楊景のことを尋ねても隠し通す。怪しく思った呼延必顯はとうとう楊景を見付け出し、銅臺城の危機を救うように命じる。楊景は以前配下にいた将軍達を集めることにする。〈第一折〉

楊景は岳勝、焦贊、孟良らと共に銅臺城の包囲を破り、城に入っ  
て寇萊公にまみえる。顔洞賓の布く天陣を見た楊景は、それを打ち破るべく諸將に命じて軍勢の手配をする。〈第二折〉

諸將の働きによって天陣が破られる。韓延壽は討ち取られ、顔洞賓は生け捕られる。〈第三折〉

楊景らは勝利を収めて凱旋する。寇萊公が酒宴を開き、楊景と諸將はそれぞれ官位を授けられる。〈第四折〉

10. 原文は「(正末云) 您衆將、誰敢打這天門陣去也。(楊宗保云) 父親、您孩兒打這天門陣去。(正末云) 楊宗保、憑着你甚麼武藝、你敢打那門陣去。(楊宗保云) 父親、憑着您孩兒身材凜凜、志氣昂昂、敢與番兵打陣交戰去也。(正末唱) 【上小樓】他氣昂昂的揚威耀武、他威凜凜的戎裝結束。(楊宗保云) 您孩兒仗父親妙策神謀、您孩兒千戰千贏也。(正末唱) 憑着你那千戰千贏、百戰百勝、妙策神謀。(楊宗保云) 父親、憑着你孩兒手中定准刀、敢當番兵也。(正末唱) 則你那定准刀、衝陣馬、把賊兵當住、直殺的些個敗殘軍可也亂逃無數。(云) 楊宗保、撥與你三千軍馬、則要你小心在意、成功而回也。(楊宗保云) 得令。奉父親將令、領三千軍馬、打天門陣、走一遭去。雄兵率領出銅臺、猖獗匈奴犯境來。揮刀奮勇施威武、我着他遍山堆起虜屍骸。(下)」

テキストとしては、王季思主編『全元戯曲』(人民文学出版社、一九九〇・一九九九年)の校訂を参照したが、こちらで文字や句読点を改めた部分もある。

11. 原文は「將及半午、郡主用力戰久、動了胎息、忽覺肚腹疼痛、漸漸難忍。郡主遂大叫一聲、好苦。部下軍士無不失色。須臾墜下馬來、產一英孩、昏悶倒地。…〔中略〕…桂英下馬、扶起郡主、將所生之孩包裹了、放在己之懷內、復扶太郡上馬。然後自跳上馬殺出、遂破了青龍陣。」

12. 先述した通り、楊文廣には実際に兄がいたようなのだが、特に目立つ功績なども記録されていないことから、このことが楊宗保の人物造形に何か影響を与えたわけではないと考える。

13. 原文は「若以理論、非臣等負朝廷、乃朝廷負臣家也。始祖繼業、王侁排陷狼牙、撞李陵之碑而死。七郎遭逢仁美、萬箭攢身而亡。六郎被王謝之害、充軍充徒。迨及狄青、張茂、吾祖吾父貶職削官。聖主不明、詞章之臣密邇親信、枕戈之士遠隔情疎、不得自達。讒言一入、臣等性命須臾懸于刀頭。此時聖主未嘗少思臣等交兵爭鬪之苦、而加矜恤。」

14. 小松謙『中国歴史小説研究』(汲古書院、二〇〇一年)第六章『楊家府世代忠勇通俗演義傳』『北宋志傳』一武人のための文学一』二〇一頁、同『四大奇書』の研究』(汲古書院、二〇一〇年)第一部「明代に何が起こったのか」二七頁参照。

15. 楊重勳については、田淵欣也「北漢時代の楊業とその周辺」(『人文論叢』第四十号、大阪市立大学大学院文学研究科、二〇一二年)四七～四八頁でも言及した。

16. 原文は「入爲三司戸部副使、遷吏部員外郎。奉使契丹、以曾伯祖業嘗陷虜、辭不行。」

17. 原文は「畋出於將家、折節喜學問、爲士大夫所稱。在山下討蠻、家問至、即焚之、與士卒同甘苦、破諸峒。及用之嶺南、以無功斥、名稱遂衰。」

18. 以下は、前掲何冠環氏論文二九八頁による。この指摘は初出時にはなく、論文集に収録された際に加筆されたものである。

19. 河南省文物研究所・河南省洛陽地区文管処編『千唐誌齋藏誌』(文物出版社、一九八四年)下冊、一二九六頁。

## 付記

本稿は、日本学術振興会による令和元年度科学研究費補助金(基盤研究C)課題番号18K00362「語りの変遷—『夷堅志』の新しさ」の成果の一部である。

## On the Third Generation and Later of the Generals of the Yang 楊 Family: Focusing on Yang Wenguang 楊文廣

Kinya TABUCHI

In this paper, I considered the third generation and later of the Generals of the Yang 楊 where historical facts greatly differ from stories, focusing on Yang Wenguang 楊文廣 who is the grandchild of Yang Ye 楊業 in history.

First I confirmed the historical facts related to Yang Wenguang. Although the descriptions of the biography of “Song shi” 宋史 are quite simple, I was able to follow the footsteps of Yang Wenguang in more detail by also using contemporaneous historical materials. Next, I examined the situation of the third generation and later of the Generals of the Yang Family in the story. Including the birth status, the number of generations of Yang Wenguang depends on the text of the novel. Correspondingly, in the story, a fictional character named Yang Zongbao 楊宗保 appears as the father or brother of Yang Wenguang. This was a setting depicting a scene in which father and son enter the battlefield together, one of the characteristics of the stories of the Generals of the Yang Family, keeping the fact that the real Yang Wenguang was born in the later years of Yang Yanzhao 楊延昭 in mind and filling in the blank period.

In the story, Yang Wenguang has four sons, and the fourth son; named Yang Huaiyu 楊懷玉, is the most prominent. He played an active part on the battlefield, and finally came to declare a break-off from the imperial court where the wicked retainer’s power would never end. In his speech, the warrior’s self-assertion, which was shared with “Shuihuzhuan” 水滸傳, was clearly presented.

Lastly, I took up the clan of Yang Zhongxun 楊重勳, the younger brother of Yang Ye. Particularly, Yang Tian 楊暉 was born in a military retainer’s family and worked as a civilian court official because he was not able to make a large contribution on the battlefield, as opposed to Yang Wenguang who lived in almost the same age.

Keywords : stories of the Generals of the Yang 楊 Family, Yang Wenguang 楊文廣, Yang Zongbao 楊宗保, Yang Huaiyu 楊懷玉, Yang Tian 楊暉